



サプライヤーからの電話に対応する安達さん。

島根大学では法文学部社会システム学科経済コースに所属し、情報技術を活用した経済学を学んでいた安達さん。大学時代に得た知識や研究成果を生かしつつ、生まれ育った島根で働ける場所を探していた時、指導教員に勧められたのが、オネストでした。自社製品の企画から製品開発、営業までを一貫して行う県内では珍し

情報技術を活用して 生まれ育った地域に貢献 日本の製造業発展も狙う

腐れ。メーカーとの緩衝材的な役割を担いつつ、できるだけ横文字や難しい単語を使わないようにするなど、分かりやすい操作指導を心掛けています」と安達さん。実際にソフトを導入した県内外の企業に足を運び、操作説明会を開催するなどのシステム導入の支援を行っています。「コロナ禍でオンラインが続きましたが、やはり表情や反応を直接感じ取れる対面支援の方が、効果やお互いの思いが伝わりやすいと感じます。当初は尻込みしていたお客さんが、ソフトを活用できるようになって助かりましたと感謝して下さる時が一番やりがいを感じます」。



お客様と打ち合わせをする安達さんと藤江さん。4月に入社した藤江さんは、島根大学総合理工学部知能情報デザイン学科卒業の新戦力です。

そんな安達さんが、在学中の学生に向け、メッセージをくれました。「オンラインでなく、外に出て友人と遊んでほしい」。SEやプログラマーと言え、パソコンに向かっているようなイメージも抱きがちですが、実は顧客とのコミュニケーションが最も重要だと言います。「生身の人間であるお客さんから直接要望や困りごとを聞き、必要なアプリケーションを生み出したり、解決したりするのが仕事。学生時代に仲間と過ごす時間は、多くの仕事にも生きてくると思います」。

いパッケージメーカーです。「松江に本社を構えつつ、自社商品を全国各地に販売していると知って興味が増えました。今後、どんな需要が伸びるであろうITを利活用して、地域に貢献できると感じました」。オネストは現在、日本全国の中堅から大規模メーカー約150社と取引があり、e商買の稼働実績は275事業所、サプライヤー5万社に上ります。「目標は、e商買の導入企業を200社に伸ばし、製造業における取引をより円滑化し、日本の製造業の発展に貢献することです」。

技術や知識はほぼなかったと言います。しかし今では、システムエンジニア(SE)の能力も身に付いています。「入社後に手厚い研修があった上、同じ部署の先輩からも丁寧に教えてもらったので困るようなことはありませんでした。特にSEとして金融機関に派遣された10年間は、非常に大きな経験となりました。金融系SEはシステムの不具合で信頼性を大きく失う可能性が高く、障害は許されません。ミスをしないためのノウハウが身に付き、自信にもなりました。理系じゃなくても大丈夫。僕が出来ていることが証明です」と笑顔を見せます。

読者の声 Voice

広報しまだい vol.54に寄せられた声をお届けします。

島大の新しいロゴマーク、3本マークがご縁を感じられて、とても良いと思います。

(島根県松江市・40代女性)

島大生が、松江市と関わる姿をもっと見たいです。

(島根県松江市・50代女性)

「100円弁当」販売とても良いことだと思います。学生も物価高で大変だと思うので、今後も継続を期待しています。

(島根県出雲市・70代女性)

なんととっても工学部(エネルギー)ができたことが一番うれしい。卒業生が県内に勤めることを期待しています。

(島根県出雲市・80代男性)

一般の人にも理解しやすい話題で、社会と大学の関わり活性化に繋がる企画を期待しています。

(長野県岡谷市・30代女性)

Creates the Future
HUMAN OPEN NETWORK
社会で活躍する卒業生
A graduate of Shimane University
No. 18
サプライヤーサポート

卒業後も様々な分野で活躍する島大OB・OG。その中から、山陰をフィールドに活躍する注目の人を紹介するシリーズ企画です。今回は株式会社オネストに勤める安達さんに、現在の仕事内容やそこに至るまでの道のり、今後の展望についてうかがいました。

Profile
安達 弘幸 さん
株式会社オネスト
システム製品開発本部
サプライヤーサポートユニット 主任
島根県松江市出身。2006年に法文学部社会システム学科(現:社会文化学科)経済コースを卒業。ソフト開発を担う株式会社オネストに入社。入社後にはSEの技術や知識も身に付け、現在は製造業DXを推進する自社開発ソフトのシステム導入支援業務などを担当。

製造業のDXを推進する
自社開発ソフト導入支援
顧客の連携に大きく注力

コロナ禍やウクライナ危機が世界中にもたらした影響の一つが、レジリエンス(復元可能性、変化や不測の事態への対応力や回復力)への意識です。サプライチェーン(供給網)の混乱に拍車がかかる中、製造業では、「何を、どこで、どの程度つくり、どのように供給するか」という命題に迅速かつ正確に対応することが、企業の生命線になってきたのです。そんな中、急激に重要性を高めているのがDX(デジタルトランスフォーメーション)の推進。株式会社オネストが開発した製造業向け調達業務システムの新製品は、仕入先の評価機能なども備え、メーカーとサプライヤーの強い連携につながるとして高い注目を集めています。

システム製品開発本部主任の安達さんは現在、自社開発のパッケージソフトウェア「e商買DX」のシステム導入支援などを担当しています。大手メーカーの場合、サプライヤーが100社から1000社を超えることもありませんが、発注先の選定は担当者の勘や経